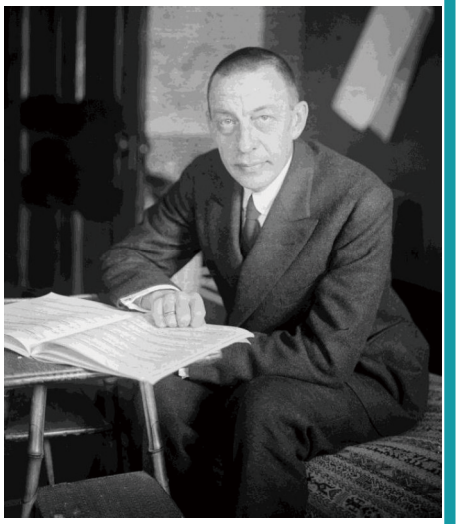
仙台銀行ホール イズミティ21 再オープン記念

イズミノオト×せんくら
ラフマニノフ哀愁ノ旋律

ラフマニノフの観ていたもの

文・土田 定克（ピアニスト・尚絅学院大学教授）

ラフマニノフの音楽は、ストレートに伝わってきて聴き手の心を揺さぶるものがある。ラフマニノフ自身、「私が創作において心がけているのは、作曲している時に心の中にあるものを簡潔に、そして直截に語るということなのです」と述べた。では、この二十世紀の巨匠の心の中にあったものとは何か。なぜ、かくも遠くを見つめているのに、心に迫りくる音楽なのか。



セルゲイ・ラフマニノフ 1873 - 1943

悲しみの三重奏曲 第一番

まず、ラフマニノフがモスクワ音楽院在学中に書いた作品を聴いてみよう。従妹サーティナの「ラフマニノフの思い出」の中に、次のような記録がある。「一八九〇～九一年の冬は、作曲に打ち込んでいました。（中略）ピアノ協奏曲第一番のほか、ピアノ三重奏曲も完成させました」と。この曲の楽譜は一八九二年一月三十日の初演後に紛失し、一九三〇年にラフマニノフの友人スロノフが永眠した際に、遺族が遺品の中から手稿を発見したおかげで甦った。

この曲はソナタ形式でLento lugubre（慟哭のレント）という指示があり、遠くを見やるような冒頭四音が全曲を貫く。五音音階に近いその動機は東洋的でさえあり、われわれ日本人の感性に近い。開放弦の前奏にのって第一主題がピアノで現れ、弦楽器に受け継がれてゆく。情感豊かな第二主題（下行旋律）はヴァイオリンから始まり、冒頭動機に取って代わられ、天にむかって叫ぶような頂点に至る。移ろいやすい展開部が劇的に断たれると、その霧の中から再現部に入っていく。

最後は葬送行進曲のように（Alla marcia funebre）、遠のく鐘の音を後にしながら静かに曲を閉じる。この孤高の寂寥感は何なのか。

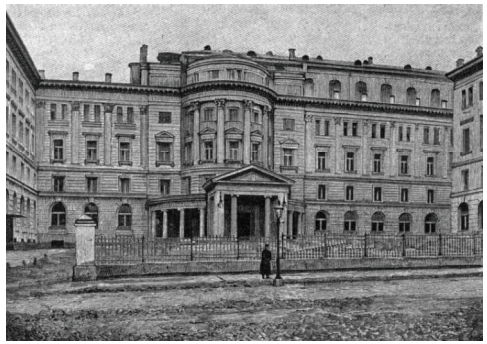
ヴォカリーズ

チェロとピアノによる演奏

もはや音楽史上の名旋律の一つとなったこの曲は、ソプラノ名歌手ネジダノワに献呈された。原曲は歌詞のない歌曲だが、作曲家の存命中からオーケストラに編曲され、今ではほとんどの楽器に編曲されている。

本日の演奏は、ラフマニノフがピアノの次に愛したチェロの編曲版。各楽器の「歌わせぶり」を余すところなく発揮させるこの旋律曲線は、聴く人の心を魅了してやまない。バロック様式の素朴なピアノ伴奏に、高きに思いをはせる旋律が飛んでゆく。その旋律は「怒りの日」の冒頭四音に始まり、ロシアの古代聖歌であるズナメニ聖歌のようにポペフカ（小さな音型）を組み合わせて紡がれている。各ポペフカの語尾は基本的に上向きで、苦しみつつも天を仰ぐような抑揚となっている。この曲が完成した二年後（一九一七年）に、ラフマニノフは母国ロシアから去ることとなる。

一八七三年	ラフマニノフ誕生
一八七八年	母親からピアノの手ほどきを受ける
一八八二年	ペテルブルグ音楽院入学
一八八五年	モスクワ音楽院に入学 「ピアノ協奏曲 第一番」作曲 「ピアノ三重奏曲 第一番」作曲
一八九二年	モスクワ音楽院を卒業
一八九七年	「交響曲 第一番」作曲
一九〇一年	「ピアノ協奏曲 第二番」作曲
一九〇二年	「チェロ・ソナタ」作曲 ナターリア・サーチナと結婚
一九〇四年	ボリショイ劇場の指揮者に就任
一九〇六年	イタリア・ドイツに移住
一九〇七年	「交響曲 第二番」
一九〇九年	モスクワに戻る
一九一五年	「ピアノ協奏曲 第三番」作曲
一九一七年	「ヴォカリーズ」作曲 北欧に亡命
一九一八年	米国・ニューヨークに移住
一九三一年	ボストン交響楽団の指揮者に就任 スイスに別荘を構える
一九四二年	「交響的舞曲」作曲（最後の作品）
一九四三年	米国市民権を得る、死去



1901年のモスクワ音楽院

チェロ・ソナタ ト短調 作品十九 より

第3楽章&第4楽章

自然豊かなイワノフカの別荘にて一九〇一年夏に作曲されたこの作品は、かの有名なピアノ協奏曲第二番の直後に生まれ、友人のチェリストであったブランドゥコフに献呈された。このブランドゥコフと共に、ラフマニノフは「悲しみのピアノ三重奏曲 第一番」も初演し、このチェロ・ソナタも初演したのであった。

哲学的な第一楽章、緊迫感と抒情が行き交う第二楽章につづいて、本日奏でられる第三楽章は自然の美しさに見惚れるような珠玉のアンダンテである。ロシア人のアンダンテは、概して西欧のそれよりも緩やか。イグムノフ教授（一八七三～一九四八）が「ラフマニノフのアンダンテは抒情歌における最高峰の一つだ」と感嘆したように、完全五度を行き来する主題が心の平安を象っている。第四楽章では心機一転、決意に満ちた第一主題と、朗々とした第二主題が創造主を讃えている。この第二主題が再現部で昇華するさまは圧巻。未来への希望に満ちたコーダでは、ラフマニノフの愛した「聖三打（タタタン）のリズム」（弱弱強格。第一楽章の示導動機）が再現して力強く幕を閉じる。

「音楽とは愛、その母は悲哀」と断言したラフマニノフは、作曲家のあるべき姿を次のように告白した。「作曲家が音楽で表現すべきことは、母国の精神、愛、信仰、好きな本や絵画から湧き出た思想です」と。また、自作品の理解への糸口として「私の音楽は、愛や苦しみ、悲しみや宗教的心境を語ったものなのです」と明示した。十九世紀ロシアの哲学者キレエフスキーも「人間とは、その人の信仰だ」と言う。正教徒であったラフマニノフが信じたものは、主イエス・キリストをとおして示された聖三者（三位一体）の神の愛である。十字架の受難が示しているように、真の愛は苦しむことが多い。ラフマニノフの哀愁の旋律が遠くを見ているのに心に近く響くのは、このためである。

Sergei Vasil'evich
Сергéй Васи́льевич Рахма́нинов
Rachmaninov